

【学習活動の概要】

1 単元名 りんごづくりのさかんな津軽平野

2 単元の目標

津軽平野のりんご生産の様子に関心を持ち、土地や気候などの自然条件、農家の工夫や努力、流通過程、品種構成などについて調査したり資料を活用したりして調べ、それらは自然環境と深いかかわりがあることを考えるようにする。

3 評価規準

【社会的事象への関心・意欲・態度】

津軽平野のりんご生産の様子に関心を持ち、それを意欲的に調べ、りんご生産の発展を考えようとしている。

【社会的な思考・判断・表現】

りんご生産が消費者の需要や自然環境・社会的条件とかがわりをもって営まれていることを考え適切に表現している。

【観察・資料活用の技能】

りんご生産の様子について必要な情報を集めて読み取ったりまとめたりしている。

【社会的事象についての知識・理解】

農家の人々が工夫や努力を重ねて消費者に喜ばれるりんごを生産していることや生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き、りんご生産は自然環境・社会的条件と深いかかわりがあることを理解している。

4 教材

全国生産量の50%以上を占める青森県、特に津軽平野のりんご生産は、消費者の需要や自然環境・社会的条件と密接にかかわりながら営まれている。例えば、消費者の需要とのかかわりでは、品種改良とC A 冷蔵庫への貯蔵が、自然環境とのかかわりでは生産に適した夏の冷涼な気候と水はけのよい地形が、社会的条件とのかかわりでは人手不足を補う「おい化栽培」が児童にも分かりやすい具体例として挙げられる。これらの各農家がこの三つのかかわりを総合的に考えた結果としてのりんご畑の品種構成は、市場価格のみにとらわれていないことから、多面的な思考をするきっかけとなる。

5 主な学習活動

(1) 単元の指導計画（全11時間）

	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	○りんご生産の帯グラフから学習問題をつくる。(1) 津軽平野のりんごづくりは、どのようにおこなわれているのだろう。	・グラフの読み取りを丁寧に行い気付いたことを発表させる。
第2次	○見学や資料により次のことを調べる。(6) ・津軽平野でりんご生産が盛んな理由 ・りんごづくりの1年 ・りんごの品種改良 ・りんごの貯蔵と流通	・見学の結果を図や表で記録させるだけでなく、疑問やそれに対する予想を話し合う活動を大切にする。
第3次	○各班ごとにりんご農家の品種構成を調査し、学習問題をつくる。(2) 本時(1/2) なぜりんご農家の人は一番高く売れる『ふじ』以外の品種もつくるのだろう。 ○予想を立て、調査や資料により確かめる。(1) ○学習したことをレポートにまとめる。(1)	・調査活動の前に予想を立てさせることで、調査後の話し合いを活発化させる。 ・予想と調べた結果を比べて、自分の理解や考えの深まりを振り返らせるようにする。

(2) 本時の学習（8/11）

①目標 各班で調査してきたりんご農家の品種構成を帯グラフに表し、調査前の予想と比べながら話し合うことを通して学習問題を設定し、その理由を予想するようにする。

②展開

- 各班ごとに聞き取り調査してきたりんご農家の品種構成を帯グラフに表す。
- 班ごとに調査前の予想と比べながら分かったことや疑問について話し合う。
- 調査結果から分かったことや疑問を発表し合い、学習問題を設定する。
- 班ごとにりんご農家の人が『ふじ』以外の品種も作る理由を予想し話し合う。
- 次の聞き取り調査の進め方を確認する。

## 【指導事例と学習指導要領との関連】

小学校学習指導要領・社会の第5学年の内容(2)では、「我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを考えるようにする」、「ウ 食料生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き」と示されている。また、各学年にわたる内容の取扱いと指導上の配慮事項として「社会的事象を多面的、総合的にとらえ公正に判断できるようにする」ことが示されている。『小学校学習指導要領解説 社会編』においては、学年の目標に関する記述として「調べたことや社会的事象の意味について考えたことを、根拠や解釈を示しながら図や文章などで表現し説明することができるようにする」ことが示されている。

本事例の第3次は、「農業は、消費者の需要や自然環境・社会的条件に合わせて価格と費用とを勘案して営まれている。」という社会的な見方や考え方の育成を意図して、これまで扱われることが少なかった農業経営の内容を中心に構成・実践したものである。具体的には、「なぜ、りんご農家の人は一番高く売れる『ふじ』以外の品種もつくるのだろう」という学習問題のもと、りんご農家への聞き取り調査や班ごとの話し合いなどを通して、次の四点の理由をつきとめさせた。

- 1 収穫時期の分散により人件費を削減するため。
- 2 晩生種の『ふじ』が台風や雪の被害に遭った時にその経済的な被害を最小限に抑えるため。
- 3 消費者の需要・嗜好の急激な変化にも対応できるようにするため。
- 4 消費者の多様な需要に応えるため。

本事例は、各班ごとに調査してきたりんご農家の品種構成を帯グラフに表し、それについての疑問や予想を話し合った場面である。児童がよく考えながら追究や表現に取り組むように、ここでは敢えてりんご農家への聞き取り調査を二度に分け、話し合いの場面を設定した。

ここでの話し合いが充実した結果、その後の学習において次の二点の成果が見られた。

- 1 一人一人が解決の見通しをもって二回目の聞き取り調査を行っていた。例えば、従来の聞き取り調査では、ほとんどの児童があらかじめ決められた質問を繰り返すだけだったが、本事例では、自分たちの予想が正しいかどうか様々な角度から質問を考えることができた。
- 2 単元末のレポートにおいて、調べた事実だけでなくわかったことや考えたことも表現できるようになった。例えば、「りんご農家の人はみんなに喜んでもらうことだけでなく、価格や費用のことも考えてりんご畑に植える品種を決めている。」といった内容の文章が随所に見受けられた。

## 【言語活動の充実の工夫】 —目的を明確にして学習過程に位置付ける—

本事例では、次の三点により言語活動の充実を図った。

第一に、りんご農家への聞き取り調査を二度に分けることで、その前後の言語活動とともにそれぞれの目的を明確化した。すなわち、下記の学習過程を明確にすることで、それぞれの段階で何を考え表現すればよいかを児童にはっきりと意識させた。

(情報収集の見通しをもつための言語活動) → (情報収集のための調査) → (収集した情報から学習問題を設定し予想を立てるための言語活動) → (学習問題を解決するための調査) → (学習したことをまとめるための言語活動)

その結果、これまで(調査) → (話し合い)の漠然とした学習過程では、何を考え話せばよいのなかなか見いだせなかった児童が、調査結果から考えた疑問を自信をもって発表したり、積極的に予想を立てたりできるようになった。

第二に、よく考えながら聞き取り調査を行うよう、一回目の調査の前に情報収集にあたって見通しをもたせるための言語活動の場面を設定した。具体的には、『ふじ』の市場価格が他の品種と比べ圧倒的に高いことを理解させた上で、「もし、自分がりんご農家だったらどの品種をどのくらい植えるか。」という「if-then」の発問をし、児童たちに話し合わせた。その結果、児童は「おそらくりんご農家の人は一番高く売れる『ふじ』ばかりを植えているに違いない。」という見通しで一回目の聞き取り調査に取り組んだので、数種類の品種をバランス良く育てている現実に驚き、話し合いでも疑問・予想を意欲的に発言することができた。

第三に、学習問題「なぜ、りんご農家の人は一番高く売れる『ふじ』以外の品種もつくるのだろう」に対する予想を話し合う前に、一人一人にりんご畑全部に『ふじ』を植えた時のメリットとデメリットを考えさせた。予想を考えるための具体的な観点を示したのである。その結果、児童はそれまでに調べたことから、過去に起こった『国光』という品種の価格大暴落や台風による被害、りんご農家が労働力不足に悩んでいること、『ふじ』が晩生種であることなどの事実を発見し、ワークシートにデメリットを書き込んでいく姿が見受けられた。また、話し合いの場面でも根拠となる資料などを示しながら事実をもとに予想を話し合うことができた。